Book Review 15-25 時代小説　＃碧血の碑

『＃碧血の碑』（赤神諒著）を読んでみた。著者は小説家、法学者、弁護士。上智大学大学院法学研究科教授。日経小説大賞、大藪春彦賞を受賞。

時代小説は勝者の物語が蔓延しているが、著者は「敗者」たちに焦点を当てて、本書には5編の短編を収録している。そして人物と建造物が対になって登場する。

沖田総司と三条大橋。結核に罹っている総司と京娘と恋。三条大橋が舞台。近藤勇の命を受けた沖田は医師の娘と逢瀬を重ねるも、新選組からの任務を前に恋と大義の間で揺れ動く。新選組の話は読み過ぎのためか、あまり心は動かされない。

橋本左内と養浩館。福井藩主・松平慶永との初引見で、突然池に飛び込んだ橋本左内が印象的。25歳で井伊直弼に処刑されたが、著者の文章から、無名の市井の人々に様々な影響を与えたことや橋本左内の人間力と碩学さが伝わってくる。彼があと20年長生きしたら日本はもっと良くなっていたかもしれない。司馬遼太郎が坂本竜馬を取り上げたように、橋本左内について誰かが小説を書いて欲しいものだ。本編は『時代小説ザ・ベスト 2024』(日本文藝家協会・編)にも選出されているそうだ。

和宮と江戸城。徳川家茂との政略結婚のため江戸城に入った和宮（皇室）と大奥の義母にあたる天璋院篤姫（薩摩藩）との主導権争い。はじめは京風と武家風で激しく対立するが、夫の徳川家茂の優しさに支えられ、天璋院に惹かれて、敵であった武家の根城である江戸城を協力して守ろうとする。これまでの女の城という大奥を別の視点から描いている。

若きフランス人技師ヴェルニーと横須賀造船所。日本を金儲けと立身出世のネタにしようとした外国人が、日本の将来を真剣に考えて行動する幕閣小栗上野介（一本のネジを後生大事に持ち歩く）と行動をともにするうちに、私欲を忘れて日本の工業化に粉骨砕身するようになる。国外逃亡すれば助かったのに日本に残って小栗上野介も若くして処刑されている。小栗上野介についても誰かが小説を書いて欲しいものだ。

柳川熊吉と碧血碑。本書のタイトルとなった「碧血の碑」とは、函館山の麓に

1875 年に建立された箱館戦争での幕府軍の死者の慰霊碑のことである。約 800 人の戦死者を弔っている（土方歳三も）。「碧血」とは、『荘子』外物篇の記述「萇弘は蜀に死す。其の血を蔵すること三年にして、化して碧と為る」から来ており、忠義を貫いて死んだ者の流した血は、三年経てば地中で宝石の碧玉と化すという伝説に因む。
旧幕府軍戦死者の遺体は戦闘終結後も埋葬が許されず、斃れた場所に腐敗するまま放置された。それを箱館の侠客柳川熊吉が、明治政府からの命令違反による死刑宣告を覚悟で遺体を回収して埋葬しようとした話である（熊吉の堂々とした態度に官吏は埋葬を黙認し、熊吉は無罪釈放となった）。現代、箱館五稜郭祭などに際して碑前で慰霊祭が行われているそうだ。

勝ち誇る勝者の話より、敗者の心に浸みる物語を読みたい。